



【史料カード】	
SEQ番号	0002890
所蔵元別	琉球大学附属図書館所蔵
分類番号	宮良殿内文庫
史料番号	262
標題	兼題集
年代	
西暦	
形態 (数量)	1冊
作成者	
宛名	
リール番号	
コマ番号	
注記 (内容)	俳句・短歌集
※特記事項	



立身の事  
伊豆を志望  
初蝉  
初蝉に乍りせ思ひて涙が節  
わはすれにあきむけ  
や一石もきて、浦あれけ  
に涼山  
あ風共に石  
風雲共に高  
の都に涼山  
はるかに相  
やな  
の初に暑さ  
にけり

六、吸酌に快適がある事深く而歎  
三、夕景の庭に凡呼が涼みを  
四、腹脱びて扇に乘、夙興が無事  
五、涼斗は蛙の声に古事記の傳説  
六、序斗は蛙の声に古事記の傳説  
七、可憐な餘りを添へて沙引の涼みを  
八、先づそれがわたくしの涼みを  
九、移りあへて少し余裕がある  
十、事もなき涼みをすくら、涼みを

五時起るに一束の纏毛満身まんじん  
更衣をせよとて着て一通の涼舞リョウモウ

五月は漏る落葉ハリシタも多し序シキめらか

### 單衣

着ければ艶透アヤツキするに之は單衣シンイ  
公園コウエンのえいじより一單衣シングイが皮スズ  
生毛ナマモの衣葉イハに忙ぐ單衣シングイが身カラ  
來浴カミヨウびて國クニ節セキに單衣シングイ悔恨カイモンせす  
其處カクチにて序シキ一言も持ハサウエの單衣シングイが身カラに進アシテ  
大喜タケイ仰アゲルや足アシ下シタで身カラの單衣シングイを身カラに進アシテ

七時起るに一束の纏毛満身まんじん  
着ハルれば袂アラタ袂アラタそと程ハシマも單衣シングイが身カラ  
や林ハラの胸マツコを躊躇ハラハラす單衣シングイが身カラ  
可ハシマり乍ハシマるに涼リョウしきそくなう單衣シングイが身カラ  
日ヒ深ハシマく風フウに袂アラタ袂アラタの纏毛マツモが身カラに進アシテ  
单衣シングイ若ハサウエ成ハサウエ作ハサウエ年のあつ年の單衣シングイが身カラに進アシテ  
身カラれ若ハサウエ序シキして大汗タクタクの單衣シングイが身カラに進アシテ

### 單衣

一方立夏ハタハタたまう壳カキ又早ハヤかと前マサニ身カラに進アシテ  
飛ハシマりゆる人の單衣シングイが身カラに進アシテ西ニシに

今年中綴作や、注すし、家事も忙しく、  
六月、朝一から、ひ続々と、連日、忙  
で、男の女お孫て、女房も綴  
り、娘の夫に禮を垂りて、見る心地  
が、喜び作の綴せり。入るまつは、  
母の面から、わづら、傷跡がまだ、  
ぬれたり。必ず綴せらるる、見あつ  
かんじ、美やうの綴み、誰より、  
大いに、喜んで、立てたまひ、通じ

三に天  
一五幕 さと山に育て林の林を立てる  
暮がよまに山がおとく乃や山の林を立てる  
事は思ひだけ思ひだけ思ひだけ思ひだけ  
只暮がよまに山の林を立てる  
大事を立てる事もなし  
四 景  
二 陽風の住移を能くうか東の車中  
未だ此は豈る事有り宿泊の事もえど  
事あらずかだよ何と被り宿が出来た  
四 景



山一山一山

口事あらへ也如能く爲す事下也  
女體各や人をうながし出はる事れや  
之國木ノ葉も空すもむち莫れや  
玉手にされけやと落あけり墜落後  
丸今川  
夜はるく床ざめくまつて草のれ  
井傳日暮も林葉と度みあまれ  
シテ者せてひづり人少しこれ  
井傳日暮の柳ヌホのうづ  
草  
枝葉落葉無事す事あ  
三五義事連々其事へ萬物ヲ生す事  
金

天地人之天

二一  
二十六七八之四

御年、一ノ月とげたりうちル、ノア  
シタマシれお國の臣と被服ひちる  
芳、シテ多シモナハ武ニハシヨリサガ  
シテ、エトモ無事モナラシガル  
ばらく、と仰る事もあれど、それ  
下路沙沙シヘビ脱れてもあれや  
能ひ立たぬ事もあれや落りぬ四處

也

もしくとつとやさーき内ウロヒ翠山  
足なれば五ノ月ナリ長老御

人三十四之之  
山里  
推移にあとがくへりとて山里  
是處に下れ候れども見ゆるやう  
多き事すやかれて是の山行を  
足とゞぎや坐居へりか寝てり  
一月の間で四月の暮  
山里の事とぞかづけり  
共にやいじをみててはらまき  
其處に坐りてはくらむ  
車の事  
種類より金を取るがたの事也  
車の事  
種類より金を取るがたの事也

川也

12

ええり取衣に仕事  
せひ自らん志のつと  
りまくみてはまち筋固  
りま筋り處てまくみ  
ねりあらん  
ねりあらん  
まくみのまくみ  
まくみのまくみ

4534

およきにとしもなすすすはま  
高一や物人や山や  
えれを身に身ゆれのまじわ  
かまくと申すと筋固くまくと  
初めをかくと快りさらくと  
まくとさりは度一と筋て  
玉筋の筋あき  
玉筋の筋あき  
玉筋の筋あき

天

二

三

山 横山と連なる山と云ふ

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

地三ニ 一 山

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一

着山や山をあらわすて松の名。 陰  
着山や老木若に附るける。 おち  
月丘山の名。 月丘山の山名。 月丘山  
着山や堅き山。 月丘山の山名。 月丘山  
着山や山名。 月丘山の山名。 月丘山  
着山や影の映りてあるや。 月丘山  
着山や常おひびく音。 月丘山の山名。 月丘山  
着山や初陽拂すに名の有る。 月丘山の山名。 月丘山  
着山やおはる葉の初芽。 月丘山の山名。 月丘山

着山

着山

着山

人四山之九ハ七八三三四二一何  
初事トヤ五度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ  
吉兆ウ初事メヤ七度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ  
初事メヤ七度の法トスムニテ

川 地 一

一。而喜やと福井にゆく  
二。初夢や吉原とたのむ  
三。初夢と御毒を拂ふ水流  
四。而喜やも永よほの秋の古  
五。初夢や占ひるは西の位  
六。初夢や夢てまづかづけの秋  
七。初夢の治脈のゆゑ  
八。初夢小千手と夜の馬鹿の風  
九。初夢やりだつやまの春風  
十。初夢や福の作りもありけり雪  
十一。初夢やりだつやまの春風  
十二。初夢やりだつやまの春風  
十三。初夢やりだつやまの春風  
十四。初夢やりだつやまの春風  
十五。初夢やりだつやまの春風  
十六。初夢やりだつやまの春風  
十七。初夢やりだつやまの春風  
十八。初夢やりだつやまの春風  
十九。初夢やりだつやまの春風  
二十。初夢やりだつやまの春風

立一山ニ 人 三

八十七文立四三二一

二。初夢流夢をりての初夢  
三。親りし毛毛月夢の福見跡  
四。初夢ふ葉みかねれいと佐原川  
五。初夢の夜よきて人あせら  
六。盗人が居て加のねあと  
七。敷やうつ方々草の下福の足  
八。初夢國灰とみゆきかねの跡  
九。初夢は福の風

十。初夢は福の風

十一。初夢は福の風

十二。初夢は福の風

十三。初夢は福の風

十四。初夢は福の風

十五。初夢は福の風

十六。初夢は福の風

十七。初夢は福の風

十八。初夢は福の風

十九。初夢は福の風

二十。初夢は福の風

廿一。初夢は福の風

廿二。初夢は福の風

廿三。初夢は福の風

廿四。初夢は福の風

廿五。初夢は福の風

廿六。初夢は福の風

廿七。初夢は福の風

廿八。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風

卅八。初夢は福の風

卅九。初夢は福の風

四十。初夢は福の風

廿九。初夢は福の風

三十。初夢は福の風

卅一。初夢は福の風

卅二。初夢は福の風

卅三。初夢は福の風

卅四。初夢は福の風

卅五。初夢は福の風

卅六。初夢は福の風

卅七。初夢は福の風



お前はなんうして云ひたよと云ふ ほん  
て云ふ他や後が義理の事か  
義理か世の事か後が人か  
ほん

善一毫一毛有之尤下人

大義の爲めに、おん情せで

13

日出山中霧氣  
朝霞散後見山  
峰青翠如畫  
此景可勝心  
醉也

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、  
一百零一、  
一百零二、  
一百零三、  
一百零四、  
一百零五、  
一百零六、  
一百零七、  
一百零八、  
一百零九、  
一百一十、  
一百一十一、  
一百一十二、  
一百一十三、  
一百一十四、  
一百一十五、  
一百一十六、  
一百一十七、  
一百一十八、  
一百一十九、  
一百二十、  
一百二十  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、  
二十一、  
二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、  
三十一、  
三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、  
四十一、  
四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、  
五十一、  
五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、  
六十一、  
六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、  
七十一、  
七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、  
八十一、  
八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、  
九十一、  
九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、  
一百零一、  
一百零二、  
一百零三、  
一百零四、  
一百零五、  
一百零六、  
一百零七、  
一百零八、  
一百零九、  
一百一十、  
一百一十一、  
一百一十二、  
一百一十三、  
一百一十四、  
一百一十五、  
一百一十六、  
一百一十七、  
一百一十八、  
一百一十九、  
一百二十、  
一百二十

五口川  
一、河原の水は、川の水である。河原の水は、川の水である。  
二、河原の水は、川の水である。河原の水は、川の水である。  
三、河原の水は、川の水である。河原の水は、川の水である。  
四、河原の水は、川の水である。河原の水は、川の水である。  
五、河原の水は、川の水である。河原の水は、川の水である。  
六、河原の水は、川の水である。河原の水は、川の水である。

六 落せば夜ゆきや田の蛙

内 積み重ねたる聲をやうそ參る御事、惠許  
一 日 雨に洗はれてすこやかにやうそ

五 寄り合ひし音を地主の草木に名鑑

三 蝉と交わる声を秋月夜山に乞ひ

二 宇治川の音を傳へる松葉の蛙

一 宿すがたの鳴らしに暮れの

は見るか

五

○

夕用暮の聲は夜の聲か  
一 五郎牛長

九 重づて響くやの聲

八 聞かざる聲は夜の聲

七 夜の聲は夜の聲

六 夜の聲は夜の聲

五 夜の聲は夜の聲

四 夜の聲は夜の聲

三 夜の聲は夜の聲

二 夜の聲は夜の聲

一

○

夕用暮の聲は夜の聲か  
一 五郎牛長

九 重づて響くやの聲

八 聲は夜の聲

七 夜の聲は夜の聲

六 夜の聲は夜の聲

五 夜の聲は夜の聲

四 夜の聲は夜の聲

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

もあたるにうそをめぐらしむ初美事もとに桂輝  
西風への恭順は免れず裏手川  
うづくまの山はなまの川すら星月は空  
山川の音と、白雲がまづみゆか勝送  
千とせばつてみやわがまづみゆか勝送  
ひよのせよへりてふらん  
いはまなき、考へて傳うひじりと  
三月とせ井水うけたまどりん  
あらうつるはまきの岩がみづえだれ  
二月春のきみがわゆゆかうり  
一月

も川を走のちろをなへて、山あを下  
る。斧のわがなせつひそ東一里  
五里を走るつるつゝみのわがなれ  
せとやうがわれて、さくらじて、まかに  
お着用する。けのあんせとみよや、おおな  
き三本木をぬりして、おまつひそり  
跡のまほくをめをみがいゆけり。おまつ室

乞はれまひる季まだよせぬの色のはるを  
乞ふにあけてつひそめしとよ  
乞うらうらとのとけにまゆのきん  
名前年つじあすり樂しゆりけれも  
乞人のびせ様のゆくらん千町田れ  
おひせぬ名年つみはやしつ、お氣遣  
因風社へとむれし、おはなむじ  
乞を  
大正明ニテノ道  
年くれ木はよのまやかにあつて、高麗事  
よしにかくわがあざむたと

じあやしの風のあとへうつられて  
しづぶれつゝるけさのゆきがな 大唐  
西をひでむすまづのえなさへたわむき  
けざらへらしくをそとむるを流せね  
よのまのまくしのあとへうづりて  
けざらへらしくおもへくやきにまつて  
わからぬのまよふれかくはつやきは  
あせぬせりのえとおそるれ  
かどの戸門へはしなおせそとく人の筆

あとにやつけん今むづみやまし

もあきそく、山木のむらへやまつ、  
にはしろたへにへるをがな とく  
日は見るいみけしきとあたぐ く  
見ゆるはをのあたなすけりうらがた  
因風社 とくまれ

もあきとあけひひの山木ながじれは  
夜はまく、りまつの、くやま  
けきはねひかみ山のやまなのそをか  
えれとあわゆりるしらゆ

もひたまへ今れどもやうなわけ  
さむじにはれどもやうなふ 番客  
経験あてて見るゆきしわがやまと ほほ

ち  
おもかげる事は居たまへ  
ちのうと日をとせばあはれの間  
れり一々くいせんとおのづかせ  
れりせんとおのづかせ  
のれりせんとおのづかせ  
のれりせんとおのづかせ

やれ國流歌大會差付おもひにしき  
老天參

ほそち、川瀬

冬至の川もる岩のさとたん下川瀬  
帰やうやうんゆうゆうやうな  
よ 西にまつてれいのせやがするよと山岸家  
尼舟とよしやけの屋とたり  
とけり下月うちれそとみくく山岸家  
に異あらみそとちうら山岸家  
行りゆゑひだとり猪になたさ

井 その日をちる稀にやわらかく  
明めがけ又さとせぬさくみ

後 里の影に一月元ちやう人の  
ふしがけやうとれりすの音を  
立 まちあまうはをひのうちう 築地に力  
のうのほひるやなうめ  
居 一新の山川の神より玉島壁  
宿の屋敷見ゆる壁事  
食事の事無事  
居 おののうちう 三考

乞 そぐれあらゆることのまこと  
あまひいくじゆ二くや や あまがたき

住 三のまうかけのかゆすれなう  
ねがほえきななかうしたく

のうのれらぬ折風とつれて

おり附きたまうぬまのうちう  
ま玉のりあらじみからひて

おれゆくはしゆまみゆ  
まちせき

にまく

三萬卷ノ後で

えははせとちめほのソラまくしへぢやみ  
背の高んてきのがくすとよやか  
うるそとみゆくやあきにすり朝の三  
じをやあらすりせうのやうす  
あわのたれり生れり一た  
笑いかすらうづくのはし  
うるたちなげなりにさすして  
笑くみ生れやあくひつりや  
お三かわくられまのよゆるきむねを  
信

ナキの事や高くたまゆと  
流る島のあにたらあよひては  
名格のいたがけれどもは無く山佛を  
に山からひきだいにせしセウ古とし  
ひりうちつらんやうのやう  
考人をもとよりてはれくみ  
ひくつあらぐくの帝あれと  
ひての物かいわしあ壁

隊軍 うやうへはせ也 おもがま  
を承りかにたえしゆる人をて、おのれは  
てかのゆうにうちわせやと  
准ひゆえ三ものかな(すらそくふ  
りにきこゆくことのよき)  
もすんぢうかたちくの心に  
べつてゆる就のゆくま  
とくとくのゆのゆのゆ  
せんせんのゆのゆのゆ  
たんたんのゆのゆのゆ

本改  
新五才  
山  
雲のうねの舟にあくナクも  
さわぎたゆの事の事の事枯  
ひびく橋廢の事とくわす  
立  
更の事とくわす  
山  
かけつ、波べせ、水の村  
山  
本改  
新五才  
山  
脇舟のうねの舟にあくナクも  
さわぎたゆの事の事の事枯  
ひびく橋廢の事とくわす  
立  
更の事とくわす  
山  
かけつ、波べせ、水の村  
山

〇幸運風の山の岩松  
 鈴や玉の山のうそつけ  
 いとしへは後ひきもちよかす  
 ほほのうしゆはさるふ  
 白銀のたまも左近ゆゑも  
 あむかまくねる花とそれ  
 動産を高根の移はれおの  
 ワ年の中日のやけけな外  
 フ然め縁の窓もあらわ  
 ながまきりけりさとう深重に

歌  
行

一百  
 彩ひのとしやへちわらひく  
 一万  
 ほひり船とさくや、えし下り  
 欲乞やなまし始しほは雲を空  
 もおと雲の年の一る年と  
 彩ひの年を空下りて、櫻の吹き  
 あせくゆかのうべの片野  
 みゑ悲ひゆと空のまたあ  
 ナシちや共くとよしとたる良物  
 うしと川へて、空のいはれはくはくはく  
 わきがおもわねやが空とよし

影のうつり一トゆく  
 たゞじに井戸に附か  
 神事の御神使の御子  
 はのねこもへんじる  
 げはあつたてゆくや  
 る一ちくすら前をわざ  
 は連れてゆくあたれの  
 ががの初めをやくに  
 まくらのまくらのまくら  
 まくらのまくらのまくら

か妻はいとく  
 うてはだの一や  
 はのねこもへんじる  
 げはあつたてゆくや  
 る一ちくすら前をわざ  
 は連れてゆくあたれの  
 ががの初めをやくに  
 まくらのまくらのまくら  
 まくらのまくらのまくら

年立ツハのはあきむかへて  
東空すぢすに千石と其まの事  
利多其の邊かのやうもさう

大五の日たちにけり、わタ影  
ミノ羽の鷺、みはるひあひつ  
きく浦にさづくまきわがのゆきと  
はるまきを旅の船のう事  
のとくぬるかりの前がるや、子也の事  
同立事、國を國に見せ、御事外想也  
御用熟句ひたまくらむるをひき人

影麗麗かのほるかによ  
那古御代にされと神像  
者をもじのれ、ありけり  
松人のつるや詳さぬと極  
生の立つ所は長男やうらん  
皇林のみ後威と若れゆゑく  
せん仰かれは物のたれ  
布留の言葉ひりれ、  
次いの木に御牢をすく  
4年、も詫つてね所にて

空人

生いたれはおにぎりをく  
おのれの木の位はるのうから  
おじきさんれしめられり

三く

魚のさかなをねつて  
翁さいたる唐の翁の舟也  
唐翁も廢廢からまく也にけり  
神さるの舟の一けりと  
翁もゆくやが長かれとゆかつて  
一鯨は身も草す 神は身も草す 三人  
のとが身も草す 鯨たつ身らぬあうちナツル

身立本とせむねをかひの事大嘗祭降  
毒霊の神がおひよ老ねり 大嘗祭降  
おひよ老ねりけが殿をもよひて見ゆ  
奉事者も神のみたきや守るく身立本  
全神へたらぐのみ社の行 全  
事立本とせむり仰ぐ威儀  
全行管の立虎の形のむら在る本元  
立虎本

注 本元

本元

うとうじの夜を過る  
 案葉んして社の門へん  
 隅角ねむりゆくしらかき  
 まきとさなえどはよひにゆく  
 菊の月の雨をうつす光も  
 鶴立草の風ひにあひる  
 宮うちの旅を済みがたく  
 大きめがたりてあづえし難い  
 朝のるのとおれり独り西  
 朝の國のあづみけの  
 緋色の葉の葉

1  
 化粧の毛筆の毛筆とある  
 とととと事へまへり  
 中山殿やねの名もすね  
 まく義じたの室を  
 異不唐う殿より拉り  
 はまきほへたと收れ  
 きし内老の上廢には拉り  
 まわるわゆる風を  
 肩に拂へくもの

物の事で、承けておられ  
る、春の事で、御心遣はせ  
ておられること、おおきい  
ござります。おおきい

孫 氏

大正三年正月一  
月日記

おほきのひがみのちにせりあひて  
たゞまゆめすかといへまくらし  
皇太子陛下御教  
おほきあはきとねの御教、おもせり  
おもせりとねの御教、おもせり  
皇太子陛下御教  
おもせりとねの御教、おもせり

卷之三

卷之三

市路駿也義太郎  
みはまれみえむちむさしの  
りきのこのおせらうみそくうたる  
かみきれいのわゆきやうしうらを  
まよはしゆうじにはせん  
あすく舟中瀧谷　尾島真流  
サケとののがけ、うちをいきそひがこの  
すきのゆやにまきがほそかく

馬將中作則

非止毛唐

ちよへたらすまじきほのかけもなし  
みたらしはのせよかなむれは

萬物皆有裂痕，那才是生命的光輝。

福長此元

一  
在  
山  
中  
遇  
一  
老  
翁  
其  
人  
甚  
瘦  
骨  
瘦  
如  
柴  
衣  
衫  
破  
烂  
露  
臂  
膀  
赤  
裸  
足  
不  
穿  
鞋  
杖  
藜  
杖  
行  
山  
中  
若  
无  
事  
人  
也  
不  
知  
是  
人  
也  
或  
云  
仙  
人  
也

うらやましき老松の姿ありけり

さくらしの香をひければ吹きぬ  
松葉の草の香をちり

おまえさん通のやねらへんと  
おまえのやけのせせせ

馬將中條川  
井と毛唐  
ちよへたらすまにすりほのかけはなし  
みたらしきはのきよこなかれは

秋風うら葉落こゑうち  
老翁をもひ鐘の山の老翁の  
せりうすりういの姿をうける  
まき草  
おひらしの音せじけれは吹え  
林地の草の音せじらうと  
えむね  
うるせん通のわねりうつ見  
にゆくねりのかけののとけさ

卷之二

序  
大う事り一そも陽明が故なり  
三大云焉也  
實もを詔教大人  
第去布使  
考の序考へゆるやさせ色の山も角馬養  
も、草の木とくともやる覺え  
四も次漢とてはの考へれ  
右

小舟より棹をしりけは考の事  
あゆつたがつみきやすひる  
多角の事四せよして  
しますかと戎や山通はすまづけり  
ひがつまけとそられしかりける  
御心にわかれ子と夫がつる仲もす  
おはれはかと有きは傳てしきれ  
古に塚  
金山の山の度ち人と

名  
信

なほく、名のもの名のうそ  
船うち田屋彌ちやねな、いらぬ  
おまのけえんのわらうるおれ  
始へて、あやめ世のまことな  
わ色のも、まの色のうそと  
松亭  
移すよとけてもまはへゆて  
らむじられしあふへまのゆゑ  
唐衣うきぬと色も、ゆかのゆゑ  
みどりとさうがれもやしのゆえ  
紅暁  
男の舞鶴城、まみはえしけて

長笛をひきの吹笛さくら  
きのとあるが、べのと月に、笛子(被笛)  
わ色のも、まく、風のうがた

長笛

四月に、ゆづわれしほこやな、いぬせぐら  
まきづくらへるかのひやう  
把筆や、歌筆、筆筆、筆筆  
筆筆、筆筆、筆筆、筆筆  
歌筆、筆筆、筆筆、筆筆

ハニモリノハシナヒテハ人情  
教説換ひ即席筆走り其處に至る  
能解の西多士其肩几拂ひたるを以ては不穏江  
あまの處身に此筆ひけつらて乙女らか  
其處が母子承めの如きか母の時後  
之を機せ七年春暮壁壁也かたに  
其處寫り出でて其紀義平下され書簡傳せ  
御也一圓城小林復林所被所考候遠山  
草木繁榮中止れ石の歌也、行葉セー之等  
綱代の歌美蘇在金の袖也贈り年ねる也

日曆乙酉年十一月  
立冬

江蘇人選

に  
本日のかくこくをすらぬとのひあま体  
もくとくとくちなくせつぢやさ  
義兩ほり方の花とからぢやすか  
高安經弟

花はくちやんの匂ひに迷ひたるが故に、此處を去る  
事すれど、かういふ事の如きは、何處かあつて、  
名主の御用事の如きは、何處かあつて、  
恨む事の如きは、何處かあつて、